

同志社大学図書館司書課程70周年・ 司書教諭課程60周年 —この10年間の変化を中心に—

原 田 隆 史

本学の図書館司書課程が発足したのは1952年（昭和27年）であり、2004年（平成16年）10月には「創立50周年記念シンポジウム」、「パネルディスカッション」および記念講演が開催された。同年に刊行された本誌第30号は「同志社大学図書館司書課程50周年記念号」として刊行されている。また、2013年に刊行した本誌第38号は「同志社大学図書館司書課程60周年記念号」として各種の記録などを多数収録している。

それから10年、本年度（2022年度）は本学図書館司書課程開設70周年の節目となる⁽¹⁾。本来であれば、70周年を盛大に祝うべき記念の年ではあるが、2019年から日本中に蔓延するコロナ感染症は完全に落ち着いたとは言えない状況で、多くの人々に集まっていたいで記念式典を行える状況にはない。同志社では25周年ごとの記念事業が行われることが多いこともあり、5年後の75周年にあらためて記念行事を計画したい。ここでは、この10年間の活動を振り返り、75周年に向けてのスタートを切りたいと思う。

10年ひとむかし。過去を振り返ると大きな変化を感じる事が常であるが、本学図書館司書課程、司書教諭課程においてもさまざまな出来事があった。中でも大きいのは図書館司書課程、司書教諭課程が社会学部教育文化学科という学部にも所属する存在から免許資格課程センターに移ったことであろう。2015年4月に本学の免許資格課程センターが拡大され、それまでの教職課程に関する事務組織から複数のセンター専任の教員が所属する組織に変更となった。それにともない、教職課程を担当する教員に加えて、図書館司書課程、司書教諭課程を担当する教員も免許資格課程センターに配属されることになったのである。もちろん、この組織変更によって司書や司書教諭をめざす学生諸君に提供する授業科目、また私たち教員の待遇などが大きく変わるわけではないが、科目の設置主体や運営主体が明確になったことは大学という組織の中では大きな変更といえよう。免許資格課程センターは小さい組織であるが、それ故に小回りがきく組織でもあり、資格取得を目指す学生諸君へのきめ細かな対応が期待される。また教員の活動としては、

コロナ以前にはセンターに属す全教職員が集まったの懇親会なども定期的に開催されるなど、教職課程の先生方との交流が活発に行われている効果を生み出している。

2つ目の大きな出来事としては、大学院課程の図書館情報学教育を行う場として、2015年4月、同志社大学大学院総合政策科学研究科に図書館情報学コースが設置されたことがあげられる。大学院社会学研究科教育文化学専攻でも図書館情報学を学ぶことができ、2002年から2004年にかけて4名の図書館情報学をテーマとする大学院生が修了しているが、それ以後の修了生は途絶えていたことを考えれば10年以上たつての復活となる。総合政策科学研究科の中に設置されていることもあり、得られる学位は「修士（総合政策科学）（同志社大学）」であり、開講時間が夜間を中心に設定されていることもあって現職の図書館員にも入学していただくことができた。この大学院は残念ながら5年間のみの期間を区切って設置されたものであり、その後の継続がなされなかったため2019年度入学生を最後に入学者募集は停止されることとなったが、2015年8名、2016年10名、2017年7名、2018年4名、2019年6名の計35名の方々に入学していただいた。その中には元同志社女子大学図書館職員であり学校法人同志社の評議員でもあった阪田美枝氏が80歳を超えて入学され、テレビや新聞などでも大きく報道されたような例も含まれている⁽²⁾。入学された方々の中には勤務先が図書館から移動されたことなどをきっかけに退学された方や、修士課程の1年目で採用が決まり中退された方などもおられたが、現在までに24名が修了され、図書館長や大学教員となられた方もおられるなど、それぞれ活躍されていることは喜ばしい限りである。

3つ目に同志社大学の提供する図書館情報学教育に関して、学校司書の養成を目的とした「学校司書プログラム」の開設も特筆すべきであろう。これは2015年4月1日に施行された改正学校図書館法を受けて、2016年11月に文部科学省が作成した「学校司書のモデルカリキュラム」に対応するもので、図書館司書のような国家資格や学校図書館司書教諭のような教員免許のいずれとも異なり、大学が独自に証明書を発行する方式をとる。同志社大学でも2017年度より司書課程、司書教諭課程、教職課程で従来から開講されていた科目を中心に、学校図書館情報サービス論を新しく開講する形で「学校司書プログラム取得証明書」を得ることができる体制を整備し、2020年度より証明書を発行している。

これらに加えて4番目の活動展開として京田辺での開講クラスの大幅増加も大きな変更といえよう。具体的には2010年度まで図書館司書課程、司書教諭課程の科目は今出川校地でしか開講されていなかった。これを2011年度から京田辺校地でも一部の科目を開講し、2012年度からは必修科目全てに関して京田辺校地でもクラスを開講することにした。同志社大学では従来から司書課程、司書教諭課程で開講される全ての必修科目について昼間（1～5限）と夜間（6・7限）の両方のクラスを開講し、演習科目などにつ

いては3～4クラス開講することもあるなど、全学部の学生が取得しやすい体制を整えてきたが、京田辺校地の学生については今出川の夜間クラスなどを履修する必要があった。これを京田辺でも開講することにより、心理学部・文化情報学部を中心に履修者が急増することともなった。

最後に5番目の大きな変更点として「図書館演習」科目の位置づけの変更についてもあげておきたい。この背景としては2012年度の図書館法施行規則の改正がある。これに対応して同志社大学においても図書館情報技術論の開講などの大きなカリキュラム変更を行ったが、この時に「図書館演習」を「図書館総合演習」として位置づけ、論文の執筆も必修としたのである。従来、同志社大学の「図書館演習」では現場実習を中心とし、それに付随した調査研究などを行う内容としていたが、これを大幅に変更し、現場実習とならんで「英語論文講読」および「図書館情報学分野の調査研究」に関する内容を大幅に増やすものとした。これは筑波大学や慶應義塾大学などで開講されているゼミ形式での卒業研究・卒業論文などに対応するもので、同志社大学では数名による共同研究として1年間をかけて1本の論文を執筆する内容とした。これにより、図書館への採用試験などにおいても、これらの大学と伍する形で学生諸君が専門的な内容の学びをしたと自信を持って説明できる環境を整えることができたものと自負している。

この10年間の司書資格、司書教諭免許取得者数としては、2012～2021年度の取得者の合計で司書資格取得者が644名、司書教諭免許取得者が243名、また学校司書プログラムは2020年度が5名、2021年度が9名の取得であった。これらの取得者数は年度による大きな変動はなく、例外的に人数が少ない年度もあるが多くの年度において司書資格取得者が55～70名、司書教諭免許が20～30名の範囲での小幅な変動となっている。また卒業生のうち例年5～10名程度が図書館への就職を希望するが、2012～2021年度の図書館への就職者は図書館司書として採用された人が35名（正規職員20名、非常勤等15名）、司書教諭が3名であった⁽³⁾。特に2005年以降の最近20年にわたり図書館司書正規職員の採用数自体が少なくなっている中で、ほぼ途切れることなく複数の卒業生が採用されている大学は日本中でもそれほど多くなく、卒業生が高く評価されているものと自負している。

学部の図書館司書課程、司書教諭課程や大学院修士課程で学ぶ学生諸君の活動の場も広がっている。大学主催で従来から行われていた東京地区等図書館見学⁽⁴⁾や図書館現場で活躍中の卒業生と学生との交流会（図書館ガイダンス・ホームカミングデー）、国内外の講師を招いての特別講演会などが継続されているのは当然であるが（コロナ禍で、ここ数年は中止となっているものの）、特筆すべきは大学主催ではない自発的な学生諸君の活動の展開である。「同志社大学図書館情報学研究会 DUALIS」は、その代表的な

存在であろう⁽⁵⁾。

DUALIS は2012～2013年当時に図書館司書課程で学ぶ学生たちが自発的に集まってサークル的に活動をはじめた団体である。同志社大学新町キャンパス尋真館にある図書館司書課程資料室を場所として司書採用試験の勉強会などを細々と行っていた状態から、原田自身も予想しなかったような急激な学生諸君の盛り上がりがあり、学内外を舞台とした活発な活動を展開してくれている。たとえば、横浜のパシフィコ横浜で毎年開催される「図書館総合展」に2013年から共同研究の展示を行っているのは代表的な活動であり、DUALIS の一部有志は教員と一緒にプロツワフ（ポーランド）やクアラルンプール（マレーシア）で開催された IFLA（国際図書館連盟）の年次大会での発表も行っている。また、インターネットラジオの発信、立命館大学図書館研究会と合同で近畿地区の図書館に「図書館寄席」の出前を行う活動など教員も舌を巻く活動を展開してくれている。この数年はコロナ禍によって活動が低調となっており、DUALIS のメンバーも若干減り気味ではあるが、今後、学生諸君の活動の再点火を期待したい。

教員の構成は、原田隆史と佐藤翔の2名体制であることは変わらないが、個別にまた共同で活発な研究活動を行っている。もちろん、研究費を得た活動だけを行っているわけではないが、参考として過去10年間に獲得した外部研究資金を示す。以下は原田または佐藤が研究代表者（または実質的な責任者）として獲得したもののみで、研究協力者として参加しているものは掲載していない。

1. 科学研究費補助金 基盤研究（C）（2013-04-01－2016-03-31）
「知識の体系的・多様性を活かした新たな図書館資料提示法に関する研究」
（研究代表者：原田 隆史）
2. 科学研究費補助金 若手研究（B）（2014-04-01－2017-03-31）
「利用者に新発見を促す書架要素の解明と新たな排架法の構築」
（研究代表者：佐藤 翔）
- 3～8. 科学研究費補助金 研究成果公開促進費
（2014年度、2015年度、2016年度、2018年度、2020年度、2022年度）
「条例 Web アーカイブデータベース」（代表：原田 隆史）
9. 科学研究費補助金 基盤研究（C）（2016-04-01－2019-03-31）
「人の真の情報ニーズを汲み取るコンシェルジュ型資料検索システムの構築」
（研究代表者：原田 隆史）
10. 公益財団法人中山隼雄科学技術文化財団 研究助成（2016年度）
「読後感に対応するキャラクター育成により読書支援を行うシステム」
（研究代表者：原田隆史）

11. 公益財団法人中山隼雄科学技術文化財団 国際交流助成（2017年度）
「第83回国際図書館連盟年次大会参加」（原田 隆史）
12. 公益財団法人図書館振興財団 提案型助成事業（2017年度）
「明治期から戦後期における日本観光資料群のデジタル化プロジェクト」
（同志社大学免許資格課程センターと京都府立図書館との共同プロジェクト）
13. 科学研究費補助金 若手研究（2018-04-01-2021-03-31）
「書架注視行動の特徴と影響要因に基づく情報ディスプレイとしての書架デザインの検討」（研究代表者：佐藤 翔）
14. 科学研究費補助金 基盤研究（B）（2019-04-01-2024-03-31）
「公共図書館の多様な活動を評価する統合的指標の開発」
（研究代表者：原田 隆史）
15. 科学研究費補助金 基盤研究（C）（2021-04-01-2024-03-31）
「公共図書館が人々の行動に与える影響の特定とその測定手法の確立」
（研究代表者：佐藤 翔）

以上述べてきた内容は、過去10年間の本学図書館司書課程及び学校図書館司書教諭課程の一端にすぎないが、昨今の状況を知っていただければ一助になれば幸いである。間もなくコロナ感染症がインフルエンザと同様に感染法上5類相当の分類となり、3年前と同様の生活に徐々に戻ろうとしている。これから5年後の図書館司書課程開設75周年には多くの卒業生の皆様、関係者の皆様と祝典でお会いすることを楽しみにしている。

注：

- (1) 同志社大学司書教諭課程についても、1972年（昭和37年）の開設であるから60周年の記念の年となる。
- (2) 阪田美枝氏は2021年11月1日に逝去されました。心よりご冥福をお祈りします。
- (3) 大学で卒業時に行うアンケート調査への回答と、図書館司書課程に対する卒業生の連絡の合計。また後者については、新卒時だけではなく大学卒業後に図書館にあらためて採用された例も含む。ただし、卒業時に行うアンケート調査の回答率は例年60～70%にとどまり、また転職時などに司書課程に連絡がないケースも多いため実際の採用はもう少し多いと思われる。
- (4) 東京地区以外に九州や中国・山陰地方などの図書館見学も行われている。
- (5) 同志社大学には1980年代から図書館司書課程で学ぶ学生が集まり「図書館ボランティア」として活発な活動が行われてきた誇るべき伝統もあるが、DUALISは図書館司書課程の枠組みを超えた活動を展開しているという点で、新時代の学生中心の活動と評価できよう。

（はらだ たかし。図書館司書課程代表、免許資格課程センター教授）

